

検査一口メモ

風疹検査について

風疹ウイルスが体内に入ると2～3週（14～21日）間の潜伏期を経て、発熱とともに発疹が出現します。特に、妊娠初期に感染すると胎児が先天性風疹症候群（CRS；congenital rubella syndrome）を発症するといわれていることから抗体検査は急を要します。

昨年開催された第33回臨床検査精度管理改善検討会（2004年）でのアンケート調査（回答施設数：2,328施設）結果によりますと、国内で風疹抗体価測定を実施しているのは130施設でした。詳細は表1に示します。

表1 風疹抗体測定法別実施状況（130施設）

測定方法	施設数	備考
H I法のみ	69	24施設がL A試薬で測定（28.9%） IU/ml報告：10施設 HI換算値(倍)報告：14施設
H I法・E I A法併用	14	
E I A法のみ	38	
P H A法	9	
C F法	0	測定施設なし

H I法：赤血球凝集抑制法      E I A法：酵素免疫測定法      P H A法：受身血球凝集法  
C F法：補体結合反応      L A法：ラテックス凝集法

風疹抗体検査を実施している130施設中、H I法での報告は83施設あります。内24施設がL A試薬で測定し14施設が倍数（H I換算値）で報告、10施設が国際単位（IU/ml）で報告しています。

表2 風疹（L A法・H I法）データの比較・換算表

LA法（基準値：6 IU/ml未満）	HI法（基準値：8 倍未満）
～ 7	8 未満
8 ～ 15	8
16 ～ 31	16
32 ～ 63	32
64 ～ 127	64
128 ～ 255	128
256 ～ 511	256
512 ～ 1,023	512
1,024 ～ 2,047	1,024
2,048 ～ 4,095	2,048
}	}

表2にL A法（IU/ml）とH I法（倍）のデータ比較を示します。

H I法は8からの倍数の半定量値で報告されますが、L A法は連続数値で報告されます。

現在、H I法での検査が主に行われていますが、試薬調製や測定者の個人差により若干のバラツキがみられることから、最近ではWHO承認済み標準血清を用いたL A法（国際単位（IU/ml）を採用）が普及しつつあります。L A法は客観的で、しかも正確に短時間（約15分）で測定することが可能です。

風疹抗体が陰性または低抗体価（L A法：31IU/ml以下、H I法：16倍以下）の人（妊婦さんを除く）への予防接種の勧奨をお願いいたします。

（臨床検査センター検査実施班 課長補佐 轟 栄人）